

信じる法は法華経

『孟蘭盆御書』 (弘安三年七月十三日・一二八〇)

(本文)

悪の中の大悪は我が身にその苦をうくるのみならず、子と孫と末へ七代までもかゝり候ひけるなり。善の中の大善もまたまたかくのごとし。

目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給ふ。上(かみ)七代下(しも)七代、上(かみ)無量生下(しも)無量生の父母等存外に仏となり給ふ。ないし子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生三悪道をはなるゝのみならず、皆初住・妙覚の仏となりぬ。ゆへに法華経の第三に云く「願くはこの功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

さればこれ等をもつて思ふに、貴女(おんみ)は治部殿と申す孫を僧にてもち給へり。この僧は無戒なり無智なり。二百五十戒一戒も持つことなし。三千の威儀一つも持たず。知恵は牛馬にるいし、威儀は猿猴(ましら)にて候へども、あをぐところは釈迦仏、信ずる法は法華経なり。例せば汚(じや)の珠をにぎり、竜の舍利を戴けるがごとし。藤は松にかゝりて千尋(ちひろ)をよぢ、鶴は羽を恃(み)て万里をかける。これは自身の力にはあらず。治部房もまたかくのごとし。我が身は藤のごとくなれども、法華経の松にかゝりて妙覚の山にもものぼりなん。一乗の羽をたのみて寂光の空をまかけりぬべし。この羽をもて父母・祖父・祖母ないし七代の末までもとぶらうべき僧なり。あわれいみじき御たからはもたせ給ひてをはします女人かな。彼の童女は珠をさゝげて仏となり給ふ。この女人は孫を法華経の行者となしてみちびかれさせ給ふべし。事々そうそう(忽々)にて候へばくはしくは申さず、またまた申すべく候。

(現代語訳)

悪の中の大悪は、我が身にその苦の報いを受けるだけではなく、子から孫へと七代も続いて受けることになる。この反対に善の中の大善もまた同様である。

目連尊者が法華経を信じた大善は、我が身が仏に成るのみならず父母もまた仏に成るのである。上七代にわたり下七代に及び、さらには上に向かつて無量、下に向かつてもまた無量、この無量の父母は全て仏に成ることができるのである。子息や夫妻、それに従うところの人々、檀越らなど無量の衆生は三悪道を離れるだけでなく、全て初住に入り妙覚の位について仏と成ることができるのである。ゆえに法華経の第三巻化城喩品の中に、「願わくばこの自分のために修してきた功德をあまねくすべての人人に施し及ぼして、われらと衆生とがみなともに仏道が成じられますように」とある。さてそこで、こうした目連尊者が法華経によって成仏し、その母も成仏できたということから考えて、貴女は治部殿という孫を僧侶にもつておられる。この僧は戒をたもっているわけでも智慧が特に優れているわけでもない。目連のように二百五十戒の一戒だにもたもっているわけではない。また三千の威儀の中の一つでもたもっているわけではない。智慧は牛馬のようであり、威儀は猿猴のように備えていないが、信仰するところは釈迦仏であり、信じている法は法華経である。例えると蛇が珠を握っているようであり、竜が法身の舍利を戴いているようなものである。

藤のつるは松にかかつて千尋(せんじん)の谷をよじ登り、鶴は羽をたよりに万里もの遠くを飛ぶことができる。これは自分だけの力によるものではない。治部房もまたこれと同じである。我が身は藤のようであるけれども、法華経の松に寄りかかって、妙覚の山に登り仏に成ることもできるであろう。法華一乗の羽を頼りに寂光の空を飛ぶこともできるであろう。この羽をもつて父母・祖父・祖母ないし七代の末までも菩提をとむらうことのできる僧侶の身である。あなたは、その大變に尊い御宝を持つておられる女性である。

彼の童女は宝珠をみ仏に捧げて仏となられた。あなたは孫である治部房を法華経の行者僧侶として育てあげ、その孫の行者に導かれて仏の道を進んでおられる。いろいろとあわただしいので、詳しくはお話しできないが、また次の機会に申し上げることにしよう。